

中央大学「ライティング・ラボ」による チューターの中大杉並高校への派遣の試み

駒ヶ嶺 泰 暁 (国 語 科)

1. 中央大学杉並高等学校の卒業論文指導の概要

中大杉並高校国語科の卒業論文指導のルーツは、2003年度より施行された本校のカリキュラムにて、3年生に学校設定科目「メディア・リテラシー」が置かれたことに端を発します。メディア・リテラシーという言葉に現在ではそれほど目新しさはありませんが、当時としては置いてはみたものの、どのような内容を展開すべきか手探りが続く状態でした。そのような中で、徐々に高校生が自ら調べ・考え・論理的な文章を書く、すなわち「論文」を書くということに、この科目はなっていました。

また当時には、それまで編集されていた、公的な紙面であるはずの卒業記念文集の文面が次第に平俗化する、ということも起きていました。そこで、国語科は「卒業記念文集に代えて、卒業論文の要旨を発行しよう」という発案をし、次第に校内にコンセンサスを得ていった、という経緯もあります。その始まりは本校40期生からであり、紆余曲折を経ながら、2018年度卒業の54期生で都合14年目となります。

その間、論文指導の方向性は、徐々に形式・構成・展開の指導、ということに収斂していきました。そこには「初学者にまとまった文章を書かせるためには、基本的な文章の型の指導が必要である」という認識を担当教員間で次第に共有していった、という事情があります。それは、国語科の教員が文章指導をおこなう限りにおいて、社会問題や理系論文等の様々なテーマについては内容指導の限界があるが、まとまった分量を論理的に構成するための手解きはでき

るであろうし、一億総発信者時代においてはそれこそが必要な指導であるはずだ、ということでもあります。

その過程で考案されていったのが、本校独自の「考具」である「探究マップ」でした。この探求マップを用いた論文指導については、中大杉並高校の齋藤祐教諭（2018年度より中央大学附属中高へ異動中）による「探求型論文指導におけるアウトラインの作り方」（注1）に詳しい論考が有るので、そちらを御参照いただきたいと思います。

本稿は、そのような中大杉並高校における論文指導の試みにまつわるスピノフになります。即ちそれは、中央大学ライティング・ラボとの協働の試みです。

2. 中央大学ライティング・ラボとは

※この項は基本的に中央大学ライティング・ラボのHPからの引用です。（注2）

◎中央大学ライティング・ラボの概要

中央大学ライティング・ラボは、レポート、論文など学術的な文章の作成を支援する機関として、2011年度4月より多摩キャンパスに設置されました。

開室当初は大学院留学生を対象として始まりましたが、徐々に利用学生の対象を拡大し、2013年度より多摩キャンパスの全ての学生が利用できるようになりました。

ライティング・ラボでは、アカデミック・ライティング指導の訓練を受けた大学院生チューターが、書き手の皆さんと一緒に文章を検討しています。

論理的で分かりやすく、読み手に言いたいことが伝わる文章となるようサポートしたり、レポート・論文の基本的なルールについてアドバイスをします。書くことの支援を通して、皆さんの考える力に働きかけ、伝える力を鍛えます。

中央大学の皆さんが自立した書き手となるように支援することがライティング・ラボのミッションです。

◎誰がセッションを行うのか

ライティング・ラボでは、年間10～12名の大学院生チューターが働いています。

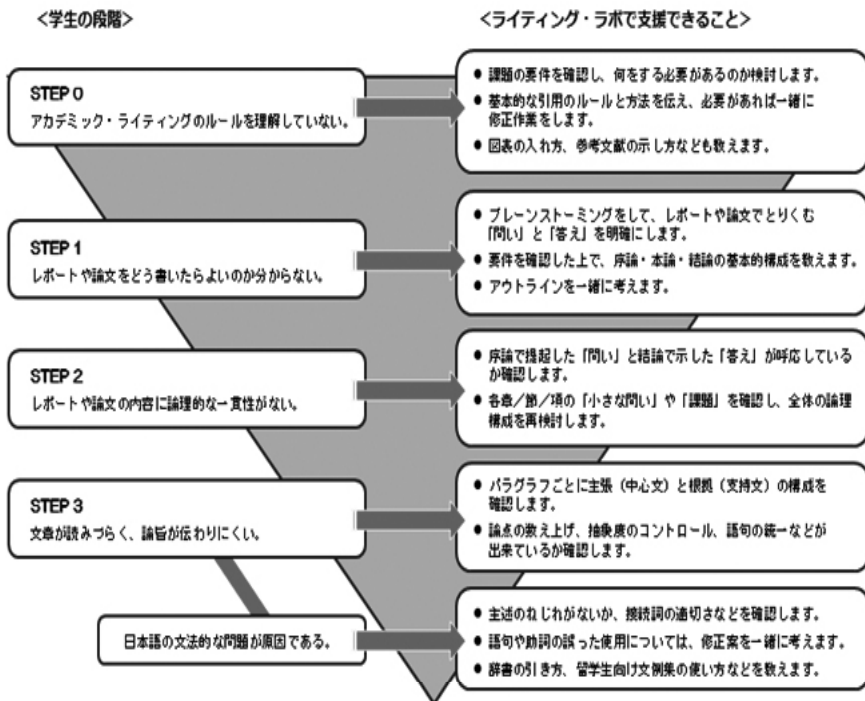
レポート・論文をよくするための観点を磨きながら、書き手を育てる文章支援の技術を研鑽したり、中央大学にアカデミック・ライティングを広める啓発活動をしています。

大学の中ででき、教育に携われる、やりがいのある仕事です。

応募資格は、中央大学の大学院生です。専門分野は問いません。

ただし応募前に、大学院の特殊講義「アカデミック・ライティングの方法と実践」を履修（博士後期課程の学生は聴講）する必要があります。

◎どのようなセッションが行われるのか(以下の図もライティング・ラボのHPから引用)



3. チューター高校派遣のきっかけ

中央大学ライティング・ラボによる中大杉並高校へのチューター派遣のきっかけは、2006年7月から2012年3月まで約6年間、杉並高校事務室で勤務されていた中央大学職員の竹之内和幸さんが、異動され配属が変わられた後は大学院事務室に勤務されていたことにありました（2013年当時）。竹之内さんは杉並高校では卒業論文に取り組んでいることを御存知であったのですが、そのサポートを大学院事務室で主宰しているライティング・ラボでもできるかもしれない、とお考えいただいたのです。

杉並高校の事務室で勤務された後、大学と高校との間で何らかの橋渡しとして機能するものはないか、といつも念頭に置いていただいていたことが、実を結んだものと思っています。

そのような竹之内さんのお考えを前向きに検討していただいたのが、やはり大学院事務室に勤務されていた吉村泰紀さんでした。吉村さんは高校生が卒業論文に取り組むことの意義を御理解され、その指導の在り方については、中大でも草創期にあったライティング・ラボのひとつの可能性としてお感じになったものと思います。

竹之内さん、吉村さんとも、ラボの大学院生チューターによるセッションが、学部生・留学生・院生に必要なのももちろんであるが、高校生の段階から有効に機能する、いやむしろ高校生段階からだからこそ早期に文章力を付けるには良いかも知れない、という認識を当時からお持ちだったのです。

このような考えは、当時としては、なかなか一般的にはない、画期的なものだったと思われます。しかし、現在これだけ普及してきた思考力、そして主体性を身につけることを中等教育段階から目標とする時代となって、ライティング・ラボの高校におけるセッションは、今まさに試行期間である新学習指導要領に説かれている新学力観を身につけさせるための先駆けと云えるはずで

そしてまた、今一つ強調しておくべきは、高大接続教育と云っても、どうしても学部学科選択や進路指導といった入学試験の制約に縛られがちなのが通例

と思われるところ、このラボの附属高校での教育実践は、ほぼその制約に捕らわれない、私立大学の附属高という強い結び付きがある中でこそ実現したものだということです。

4. 当初の不安・懸念

とは言いながら、ライティング・ラボの高校におけるセッションは、とあえげ次のような問題を抱えながらの出発でした。まずは、その確認から始めて行こうと思います。

①. 担当教員による指導と、チューターとの相談の、両者のすり合わせを如何に円滑にするかという基本の考え方に関わる問題

論文作成という事柄の性質として、生徒の主体的能動的な取り組みが何よりも大切なものであることは言わずもがなのことでしょう。しかし、大学生が発揮できるそれと、高校生が発揮できるレベルとでは大きな差があるのも、これも当然のことのように思われます。分かり易く云えば、大人や大学生であれば自ら持てる問題意識や考えも、高校生は教えてもらわねば自発的な動きにはなり難いということです。

それに対応するために中大杉並国語科が考案したツールが、①. に述べたような「探求マップ」でした。マップを用いた「型の思考」を導入することで、先ずは具体的になすべきことを見える化し、初学の者にも自ら学ぶ方法を示した訳です。

ライティング・ラボの「教えない、気づきを促す」という理念と、高校の「型を土台にして自分で考える」ことを促す、という方法は根本においては近似の考え方ははずですが、やはりアプローチの仕方には違いが出て来そうです。

そうだとすれば、普段大学生にセッションを行っているチューターが、高校生に対応する時に心がけるべきこととはどのような点でしょうか。これはなか

なか難しい問題で、最も本質的な問いの一つのはずなのですが、その答えについてはいまも継続して模索している最中と認識しています。

②. セッションに訪れる生徒の人数の、時期によるバラツキ、あるいは動機付けから受付、そしてセッション参加までの流れの管理の難しさという、チューターと生徒の具体的な動きに関する問題

中大杉並高校は普通科の高校であり、部活動や行事など、生徒は多岐に渡る学校生活を送っています。こなさなければならない小テストや課題、発表なども多く、卒業論文とは云いながら継続的にその作成に当たるのは難しく、どうしても締め切り間際に集中して取り組む必要があります。

すると、そのタイミングに指導の必要が生じ、ライティング・ラボのセッション希望者もその時期に集中して、逆にそれ以外の時期はそうでもない、ということになってしまいます。当然担当教員は早くから計画的に作成に取り組むように指導はするわけですが、これまで論文を作成したことのない高校生の場合、その切迫感はどうしても薄くなってしまいがちです。

生徒がラボのシステムを有効に活用し、よい論文を作るためには論文作成の現場に何が必要か。当面、論文指導に当たる現場は、そのような認識を持っていました。

また、チューターによるセッションは大学とは異なり、放課後の時間帯に行われなければいけません。授業時間ではないので、そこには特別な体制を敷く必要があります。どのような生徒がセッションを受けるべきか(注3)、どのように受付をし、待機をさせ、どんな準備をさせれば良いか。はたまた、セッション中は教員はどの程度立ち会うべきなのか。事前に考えるべきことは沢山ありました。

③. セッションの時間の短さ、効果のはかり難さという内容にかかわる問題

終業後から下校時刻までの放課後の限られた時間に、十分な内容のセッション

ンをより多くの生徒に提供する、ということはなかなか難しいことです。大学では学生ひとりにつき40分取っているセッションの時間を、高校では正味30分で展開し、何とか1日につき6名程度の枠を取れるようにしました。しかし、生徒が自分の論文の問題点や質問したい内容の把握を十分にできていなかったり、チューターが相談者の論文の抱える問題の所在を絞り込むことに時間をかけることが難しいなど(注4)、いくつかの問題がありました。これは根本的な解決はなかなか出来ない要因ですが、特にチューターの方々の御努力で何とかこなしていただきました。

さらには、セッションの効果の測定をどうするかという点です。相談者の実感として効果があったというのが最も望ましいかたちですが、そうでない場合にも客観的な効果測定の方法が相談者・チューターの双方にあるべきであり、またチューターに指導を行っていただく立場である卒論担当の教員もセッションの状況を把握しておく必要があります。

これらについては、ラボの側で用意していただく「ようこそシート」、高校側の準備する「振り返りシート」で対応することに次第になっていきました。前者は相談したい内容や論文担当教員に指摘された問題点を記載するもの(注5)、後者は授業時にも用いられる内容の振り返り、理解できたこと、今後の具体的な動きについて記載するもの(注6)です。

これらを元にして、毎回、そしてターム毎に高校とライティング・ラボとで打ち合わせを行い、双方の認識を摺り合わせるようにしていきました。

5. 実際の運用

1年目2014年度（チューター：文学部国文学専攻の小田切さん、経済学部経済学研究科の伊藤さん）

初年度は、2学期のみの実施でした。生徒はもちろんですが、チューター、卒論担当者とも文字通り手探りからの出発でありました。しかし、学識経験の

ある、さらにはライティング・ラボの方法論を修得している、さらに比較的高校生に年齢の近い大学院生に客観的な意見・セカンドオピニオンを貰える、ということは、相当なメリットが有るということを認識することができ、翌年度からの本格実施に向けて期待が高まりました。

当初のセッションの実施方は以下の通りです。セッションを受ける生徒は、1限目終了後に、国語科研究室前の受付表の希望の時間帯に記名する。チューターは、放課後15時45分のセッション開始に先立って出校し、教員室前のミーティング・ルーム内に設置されたブースにてセッションに備える。生徒は、自ら希望した時間にブースにやってきて、セッションを受ける。

2年目2015年度（チューター：法学部法学研究科の吉田さん、文学部国文学専攻の清水さん）

初めて1学期の題目設定から9月初稿の検討・11月の最終稿までの手直しを見ていただきました。題目設定とはいっても中大杉並の場合、4月初めから約二カ月にわたる長期間の行程になります。ここでは題目の選択と絞り込みを行い、さらにはアウトライン（前出の探求マップを用いる）を作成するという作業が含まれています。つまり、主題を叩き上げなければならない訳です。当然それは行きつ戻りつの繰り返しとなり、生徒はもちろん指導する側も大変に苦しい期間となります。

この時期はほぼすべての生徒が春期休業中に考えて来た主題について、絞り込みの不足していることや、理路が甘いことを指摘され、ほぼ全面的な再考を促されることとなります。主な事例としては、

- 現在進行形の社会問題であり答えを出すことが困難、
- 調べ学習の域を出ない、
- 用語の理解ができていない、

などの初歩的なものから、

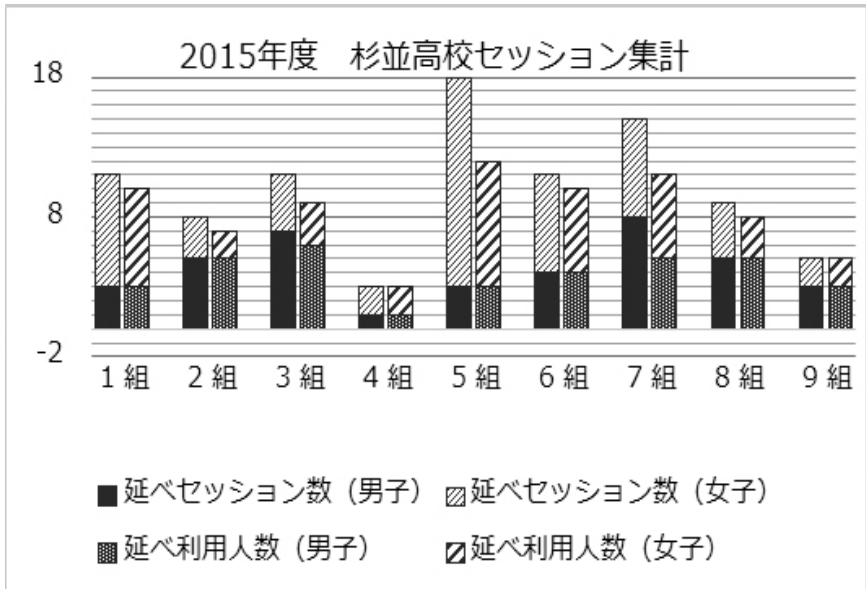
- 問いと答えに整合性がない、
- 論拠が適当でない、
- 事例を並べてみただけ、

などの技術的な問題に至るまで、多岐にわたっています。これらの課題を自覚させ、再考を促すことがまずは第一歩となる訳です。

当然、生徒は一つことに目を向けるだけでは不十分であり、常に全体の構成を意識しながら改めていかないと、なかなか上手くはいきません。一度に全容が見えてくるようなことはまずなく、少しずつ根気よくアウトラインを詰めていく必要があります。そこでは、根気と集中力が求められます。

その上で、後でアウトラインの再検討に立ち戻ることの極力ないレベルにまで完成度を高めることを目指させることになります。

ライティング・ラボの〈教えるのではなく考えさせる〉という方法は、おそらく中大杉並のやり方と共通していると思います。しかし、限られた機会・時



間の中で、生徒の選んだ題材と担当者の意を汲みながら、セッションを進めていただくことは、なかなかハードルが高いはずですが、なので、特にこの蓄積のない初年度は相当に困難だったことと推察しています。

3年目2016年度（チューター：吉田さん、文学部日本史学専攻の川島さん、文学部国文学専攻の細井さん（2学期のみ））

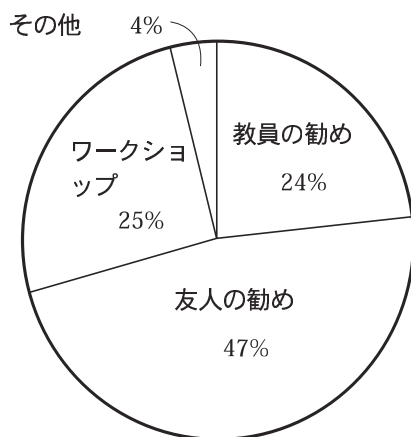
この年度は、初め（5月）にワークショップを2回実施していただきました。内容はマインドマップを用いた「題目設定の仕方（問いを立てるとはどのようなことか）」というものでした。主旨は、ライティング・ラボで実施しているテーマを設定するに当たっての方法を中大杉並でも実践いただくとともに、新3年生にラボの存在を認知させるという目的も有りました。マインドマップでアイデアを広げることは担当教員で個別に試みたことがありましたが、公的に実施したことは有りませんでした。グループでワードを決め、それについてアイデアを出して繋げていくのはマインドマップの通常のやり方ですが、拮った話題をひとつ採用して取り上げ、今一度中心に戻して、さらにワードを重ねていくようにします。このようにすると、自ずと話題が掘り下げられて絞り込まれていく訳です。上手く行けば、探求マップに移行することが出来るようになる、というものでした。概ね生徒には好評であったようです。

この年の2学期から、セッション実施場所を教員室前の「ミーティングルーム」（2F）から図書室の閲覧室の一角（4F）へ移設しました。ミーティングルームでは他の指導・相談その他活動と干渉し、集中が難しいためです。教員の継続的な立ち合い、すなわち帯同が難しくなるため慎重にすべきとの意見も出ましたが、教育効果の向上を目的として実施することにしました。結果、確かに生徒の誘導や巡視の必要はありますが、セッションの充実度は上がったので、この時から本稿執筆時現在までセッションの実施場所はこの場所となっています。

2学期は木曜日がお二人になり、3人体制に拡充されました。チューターとの信頼関係が生まれて繰り返しセッションを受けに来る生徒がいるようになるなど、次第に安定的な運用が行えるようになりました。

しかし、学校行事と重なる、提出期限がまだ先など、時期によってセッションを受ける人数には多寡があり、少ないときにはセッション枠が埋まらないということも散見されました。そのような時には一人当たりの時間を多く取るなどして対応することになり、これもチューターの方には御迷惑をお掛けすることになりました。

2016年度 来室のきっかけ



(チューターの吉田さん作成による統計データ)

4年目2017年度 (チューター：吉田さん、細井さん、文学部社会学専攻の鈴木さん、文学部教育学専攻の松井さん、文学部哲学専攻の竹生さん)

ワークショップが2年目になりました。また、2学期の目標を「初稿に手を

入れさせる」こととし、担当教員のコメントや指導の内容を解説していただくことを主要項目の一つに据えました。

本校の卒論執筆の過程は大きく高3の1年間を3期に分けられます。まずは既述の、春先からの題目設定・アウトライン作成の構想期間。そして、夏季休業期間における草稿執筆期間であり、休み明けには草稿（9月稿）を書き切ることとなります。そして、推敲期間の約2カ月を経て11月下旬の最終稿提出で一応のゴールとなる、というスケジュールです。

これまでの課題として、第2の執筆とも云うべき推敲期間に十分な書き換えを行わせる手ごたえが得られていない、ということがありました。まず、担当者は2クラスおよそ70人分の草稿を一月程度掛けて読み、添削をして返さねばなりません。その間に授業では発表をさせ、相互に論評し合い、推敲し…となる訳ですが、自ずと一人ひとりへの注力は薄くなりがちになります。自分から相談に来る生徒はケアできることも多いのですが、どちらかと云えば多く手直しをしてほしい生徒のほうが担当教員の許には来ない、という問題もあります。そのような生徒をどう指導するかは大きな課題でした。

そこで、そのような生徒をこちらから指名して、ライティング・ラボの御世話になるように促すと、この時点ではまだ評価も思わしくないこともあり（教員によっても評価基準が違うが、概ね合格点ギリギリ）、意外とすんなりと生徒はセッションを受けに行くようでした。すると、担当教員のコメントをチューターに解説して貰え、さらには新たなアドバイスも得られます。口コミで広まった効果は新たな相談者を生み出していくようでした。そのようにして、セッションの輪が次第に広がっていきました。状況がそのようになっていくと、この年のセッションは次第に活況を呈するようになっていきました。

セッション集計						クラス別 男女別 セッション数	クラス別 男女別 利用人数	男女別 利用 きっかけ
月日	利用生徒				きっかけ			
	組	氏名	回数	性別				
11/08	1		1	女	友人の勧め	1女	1女	友人の勧め女
11/08	7		1	女	教員の薦め	7女	7女	教員の薦め女
11/08	1		4	男		1男		
11/08	1		1	女		1女	1女	女
11/08	9		3	女		9女		
11/09	5		1	女	1学期に利用	5女	5女	女
11/09	2		1	男		2男	2男	1学期に利用男
11/09	4		1	女		4女	4女	女
11/09	1		1	女		1女	1女	女
11/09	1		2	女		1女		
11/14	9		3	女		9女		
11/14	9		1	女	友人の勧め	9女	9女	友人の勧め女
11/14	4		1	女	その他	4女	4女	その他女
11/14	9		3	女		9女		
11/14	6		1	女	1学期に利用	6女	6女	1学期に利用女
11/16	5		1	女	友人の勧め	5女	5女	友人の勧め女
11/16	5		2	男		5		
11/16	8		1	男	その他	8男	8男	その他男

(チューターの吉田さん作成による統計データより11月分を抜粋)

5年目2018年度（チューター：松井さん、竹生さん、鈴木さん）

4年目の2学期から来ていただいたチューターの松井さんは中大杉並の卒業生（48期生、2013年卒）です。自身が高校時代に卒論を書いた経験をお持ちである方がセッションに来て下さる事例は初めてでした。松井さんが在籍していた頃とは教員の指導法、探求マップの内容も変わっていますが、やはり事情を知っているスタッフが増えるのは心強いことでした。

もうお一方の竹生さんも修士2年と比較的年若く、セッションも松井さんと二人で実施することの多い態勢となり、フレッシュな雰囲気为本年度の特徴となりました。そのためか、1学期の題目設定期間のセッションは大変盛況で、日によっては予約が出来ずセッションが受けられない生徒が出るほどでした。

しかし、2学期になると、その状況は一変します。2学期の文化祭、体育祭やセッションを設定した曜日と重なりがちであったこともあり、生徒の足がセッションから遠のきがちになりました。1学期の様子からしてこの展開は我々にとっては予想外のことでした。本校執筆時で今年度の振り替えりがまだなされておらず、その原因は詳らかではありませんが、しっかりとした分析が必要と思っています。

6. まとめと、今後への展望

高校生が論理的な文章が書けるようになること、への敷居を下げる努力は、継続的に行う必要があります。

本校が「卒業論文（仮称）」と銘打ってその試みを始めた2000年代半ばのころは、なぜ高校生が「卒業論文」を書けるようになるべきなのかを、生徒はもちろん校内外に対しても折につけ説明する必要性がありました。今は同様の取り組みを行う学校も増え、「探求活動」の重要性も学習指導要領に謳われるようになったので、高校生の論文修業は一定の市民権を得ているのかもしれませんが、高校生の言語活動の発達段階は成人と比較して高くはないはずですし、ネットワーク社会においてスマホの普及やSNSの隆盛は、いよいよもって高校

生に限らずドメスティックな言葉の遣り取りを助長しています。ともすれば、社会に通りの良い強靱な言葉を備え、文章を書き連ねることのできる能力を伸長させることの重要性は等閑に付されがちです。面倒を承知の上での継続的な、すなわち地道な努力をしなくてはならない文章修業はどうしても敷居が高くなってしまいます。

しかし、例えばこのライティング・ラボのような活動は、高校生のような若年層の文章力向上の必要性を新たに説く機会になると思います(注7)。高校の授業だけではなく、大学や大学院が院生チューターを通じて高校生に文章の手ほどきを行う、というところが重要です。そこには、高校生であっても論理的文章は書けるべきなのだ、というメッセージが込められることになる。

一方、大学院生にとって、本校へのチューター派遣は、少し歳の離れた高校生と言葉を交わすことによって大学生にセッションをするのとはまた違った感覚を得、それを今後の研究・教育に生かす機会となるはずです。チューターにいらしていただいた方々は多士済々、年齢層も多様な方々ですが、みなさん言い方は違っても、一様に高校生の素直さについて言及されます。そしてまた、高校生に対しての言葉の通じ難さについても。現場の教員にとっては新味のないこの感覚も、学生である院生にとっては他に替え難い価値となるはずであり、それは高校の場でなければ得られないものと思います。

このようなインタラクティブな高大の相互による乗り入れこそが、今声高に叫ばれている高大接続の一つのあり方であろうと考えています。中等教育と高等教育の関係はどうしても高校生による大学の講義を体験するという所謂アクティビティであったり、あるいは大学の先生や職員の方による模擬講義や説明になってしまいがちであり、やはりそれらは多くの場合一過性のものになりがちです。

しかし、高大接続も本来はサスティナブルなものであることが望ましいことは言うまでもないでしょう。このラボのチューター派遣の試みは、そのようななかなか難しいテーマについて一つの解を示す画期的な意味があると捉えて

います。

その稀有な場の実現のために、中央大学ライティング・ラボより多大な御支援を頂戴しています。チューターの方々はもちろんですが、ライティング・ラボを御指導いただいているスーパーバイザーの中野玲子先生はじめ、大学院事務室の方々、とりわけ継続的に事務を所轄していただいている加藤裕之さんにはどれだけ感謝を申し上げても足りません。改めてこの場でも御礼を述べさせていただきます。

そしてまた、今後ともよろしく御指導のほどお願い申し上げます。

注

1. 「探求型論文指導におけるアウトラインの作り方—紙と付箋で「探求マップ」—
(中央大学杉並高等学校「紀要」2016)
2. <https://www2.chuo-u.ac.jp/daigakuin/writinglab/index.html>
(2019/02 取得)
3. 「大学でのラボの場合、ラボに行くのも学生の自主性に委ねられている。」
(ライティング・ラボの中野玲子先生からの御指摘)
4. 「大学生と高校生の差はこのよう。大学生より思考の外言化が難しいという発達段階にあるようで「問題の把握」に時間がかかるとチューターより報告あり。」
(中野先生)
5. ようこそシート

注4の「問題の把握」として利用
(中野先生)

中央大学ライティング・ラボ資料整理シート(ようこそシート)

■ 所属学部 工学部 工学系 工学系 工学系

■ 学号 工学部 工学系 工学系 工学系

■ 担当教員名 (授業科目名) (担当科目名) (担当科目名) (担当科目名)

担当教員名 - 担当教員名 - 担当教員名 - 担当教員名

■ 担当教員名 (担当科目名) (担当科目名) (担当科目名) (担当科目名)

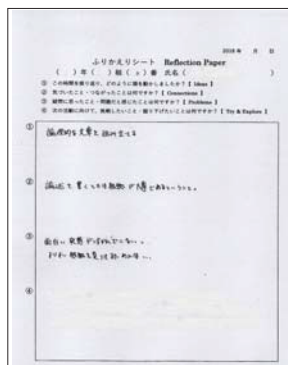
担当教員名 ()

■ 担当教員名 (担当科目名) (担当科目名) (担当科目名) (担当科目名)

担当教員名 (担当科目名)	担当教員名 (担当科目名)
担当教員名 (担当科目名)	担当教員名 (担当科目名)
担当教員名 (担当科目名)	担当教員名 (担当科目名)

6. 振り返りシート

「振り返りシート」は生徒の自覚を促すものとして使用（中野先生）



7. 例えばSGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）に平成26年に指定された筑波大附属高等学校では、1年生のSGH授業（土曜3限）に「アカデミック・ライティング入門」の授業を設けている。（<http://www.sghc.jp/p12333/>より、筑波大学附属高等学校のPDFを選択）あるいは、「中学生に対するアカデミック・ライティング指導過程の改善」登本 洋子，伊藤 史織，後藤 芳文，堀田 龍也（『日本教育工学会論文誌』2018年41巻 Suppl. 号 p. 033-036）のような中学生に対する取り組み事例などがある。

付記

ライティング・ラボのチューターさんからどのような助言をもらいましたか？
(2018年度、生徒へのアンケートより抜粋)

- 一方向から物事を見るのではなく、様々な観点から見た方が良い。
- テーマを決めるときは興味のあることを全て書き出してみると良い。
- テーマが漠然としすぎていてなかなか答えを言いにくいよということ。
- テーマをしぼったほうがわかりやすいと助言をもらった。
- 答えが問いになってしまうことと、テーマを絞ることを指摘された。
- 先行研究と異なることを書かないと独自の論にならないので、他の制度と組

- み合わせて、うまく論文にできないか考えるといいとアドバイスを受けました。
- 大きな問いを立てるときは関連する語句をたくさん挙げてから最も良いものを選ぶと良いという助言をもらった。
 - テーマを選ぶ際は、自分が社会に対して不満に感じていることをテーマにする
と良い論文になりやすい。と助言をもらいました。
 - 具体的に調べようとして、行き詰まっているところを、もっと抽象的に考えて、視野を広くするといいと助言をいただきました。
 - 根拠となるものをそれぞれ単語にしてそれから連想されることをどんどん書き出していくことで繋がり
と根拠に深みがある文章が書けると助言をいただきました。
 - どうしても現在進行形(未来)の話になりがちなので、同じテーマでどう視点
を変えるのかその方法を教えていただきました。
 - 思いついたことを常にメモしておく、自ずと自分の答えが見えてくる。
 - 一文が長くなりすぎるとよく分からなくなってしまう。
 - 問いと答えが一致しているのを常に気にした方がいいとの助言をもらった。
 - 新聞などを用いて客観性を持たす。
 - 最後に行ったのが、まだテーマも決まっていなかっただったので、どのようなテーマ
なら絞れているかアドバイスをもらった。
 - 具体的にどうすればこの問題を解決できるのかの手順を書いた方が良いと言
われた。
 - 論文担当教員の講評がどういうことを言っているのかの解説、新しい問いを
考えた時にその方向性の助言。
 - より具体性を持たせ、根拠を明確にするといいと言われた。
 - 初回しか参加していないが、テーマを絞る工程を教えていただいた。
 - 五月頃に行った時はテーマの広げ方を教わった。
 - 論文がある程度できてからは矛盾しているところや重複しているところなど
の指摘をいただいた。